

## フランスでのゴシックロリータ系

アイト ワラブ・ネスリン

### はじめに

およそ十年ほど前から、原宿を中心に、不思議の国のアリスなどに影響されたフリル服のブラウスやパニエスカートを着て、日よけ帽をかぶり、ケープ、フリル日傘などを手にする少女ゴシックロリータが出現している。この発表では初めに日本のゴシックロリータの登場を紹介し、そして、この種の流行がどのようにしてフランスに入って来たかというテーマを扱うものである。

### 1. 日本でのゴシックロリータの飛躍的な発展

1990年代の後半（97年～98年）にファッション雑誌 *Zipper* と *Junie* に初めて紹介されたゴシックロリータというのは、つぎに挙げる4つの要因が作用するスタイルであると言える。

- ・原宿のベビードール（子供服の大人サイズ服を着る人）。
- ・イギリスのデザイナー ヴィヴィアン・ウエストウッドが発表したピクトリア時代のファッション。
- ・アメリカのゴシックミュージシャンと日本ヴィジュアル系アーティストのスタイルを真似するファン。
- ・オタク文化の一部としてのメイドのイメージ<sup>1</sup>。

その結果、年月を経て、この4つの要因からゴシックロリータスタイルが生まれ、この原宿のアンダーグラウンドな流行は急速に「ケラ!」(*Kera!*)と「ケラ! ゴシック&ロリータバイブル」(*Kera! Gothic Lolita Bible*)という雑誌で紹介されたブランド *Black Peace Now*、*H. Naoto*、*Alice Aua*、*Baby The Stars Shine Bright*、などのおかげで、次第に人気が出て来た。現在、ゴシックロリータにはルールとデザイナーが存在するのにもかかわらず、等質な連動がなく、異なる三つのゴシックロリータタイプがある。

ーアマロリ (甘ロリ)<sup>2</sup>

ーELG (Elegant Gothic Lolita)<sup>3</sup>

ーインダストリアルやサイバーパンク ロリータ<sup>4</sup>

ゴスロリの初登場から十年くらい経って、現在、都会ではゴシックロリータはいまだ人気があり、有名な

ゴシックロリータの各ブランド例えば *Baby The Stars Shine Bright* など、が拡張して、海外で店を開いている。

### 2. フランスでのゴシックロリータの登場とその発展

フランスではゴシックロリータスタイルが若者のなかに急速的に浸透するには数年を必要とした。つぎの3つの段階が注目に値する。

- 1：日本アニメオタク<sup>5</sup>とヴィジュアル系ロックの音楽ファンの登場。
- 2：インターネットにおけるファン層の広まり。
- 3：アンダーグラウンドカルチャーからメインストリームエンターテインメントの世界への移動。国際的なブランド、ファッション雑誌、アメリカとヨーロッパのポップとロックアーティストの経済的な相互作用。

#### a) 第1段階 (2000年-2003年)

フランスのゴシックロリータ系は2000年代の始めに日本ロック音楽、特にヴィジュアル系と共に登場した。その数年前、この音楽スタイルはフランス人のオタク達に日本アニメテーマとして受け入れられた。*Dir en Grey*、*X-Japan*、*Luna Sea*のファンコミュニティが現れた。

同時に、日本で *Dir en Grey* や *Penicillin* などのような人気のあるヴィジュアル系バンドメンバーが *Black Peace Now* や *H. Naoto* のようなブランドとコラボレーションを始めて、「ケラ!」のモデルとして活躍した。フランスのファンは好きなアーティストの写真を集めるためにパリにある「Junkudo」日本書店で日本語が読めなくても、「ケラ!」を買うか、インターネット eBay のようなオークションサイトで雑誌を注文した。このことからファンは「ケラ!」でゴシックロリータを知り、少しずつ興味を深めていき、日本の服を真似するフランスの少女（中学生、高校生）の数が段々増えた。しかし、この初期のゴスロリジェネレーションは日本ブランドが買えなくて、ゴシックロリータ系服を見つけるために、オークションサイトで注文しなければならず、とても費用がかかり、不便であった。そういうことで、少女は自分で「ケラ! ゴシック&ロリータバイブル」に記載されている型紙を参考にして

自分で服装を裁断したり、ゴシック店の服をリメイクした。このような服は特別な機会に着るものである。

#### b) 第2段階 (2003年-2006年)

フランスのゴスロリはインターネットとゴスロリファンのおかげで段々と人気上昇した。ヴィジュアル系バンドとゴシックロリータの服に深い興味のある女性ファンはインターネットサイトを作った。インターネットの目覚ましい発達とPaypal (ペイパル) のような新しい支払い方法で海外で服を簡単に作ることが出来るようになった。それに、数年前のユーロ高で、日本へ割安旅行が簡単にでき、そういうことで日本のポップカルチャーのフランスのファンの数が増えた。フランスのゴスロリは日本で本当のゴシックロリータ服が買えるようになったが、日本ブランドの新しい服は高い値段が付いているので、ゴシックロリータ古着専門店の *Closet Child* の品物はフランスに多く売られた。

フランス及び世界中に広がったゴスロリの流行は、最初はインターネットサイト、そして少しずつメインストリームメディアで普及した<sup>6</sup>。フランスの有名なテレビ番組「Paris Mode」<sup>7</sup>はこの日本から来たファッショントレンドに興味を示し、テレビや新聞の報道も増えてきた。同時にオタク文化やヴィジュアル系のブームはフランスがその大きな獲得市場になっていることを立証している。雑誌「ケラ!」もパリに特派員を送って、「特ケラ! マニアックス」(*Kera! Maniax*)でパリでのスペシャルゴシックロリータ スナップショットを発行した<sup>8</sup>。原宿のゴスロリを真似するフランス人の少女は毎週土曜日にパリの1区にあるLes Halles (レ・アール) に集まる。

#### c) 第3段階 (2006年~)

現在、フランスのゴシックロリータ流行はもうアンダーグラウンドなトレンドではない。パリでゴシックロリータの服を見つけるのは今日とても簡単で、フランスには次のような店がある。例えば「Kawaiko」、 「Harajuku」、 「Konci」など。日本の有名なゴスロリ系ブランドの *Baby The Stars Shine Bright* はパリにお店を開き、年に一回パリで行われるヨーロッパ最大級の日本カルチャーフェスティバル「Japan Expo」の「パリ・原宿コレクション」にゴシックロリータ系のブランドは参加している。しかし、服を買うことが簡単になっても、日本ブランドはまだまだ高価で、フランス人はインターネットで香港などからいわゆる偽物を注文する。日本ブランドを手に入れることはほとんどのゴスロリファンに近寄りた夢で、従って、小さなアク

セサリーだけ買って、ドレス、コートなどは両親からのクリスマスか誕生日プレゼントに買ってもらう。そういうことで服を自分で手作りするのが流れている。

ゴスロリファン層は構成のしっかりしたグループになっていて、自分達でイベント、パーティ、ファッションショーなどを開催する。今、フランスのゴスロリコミュニティはもう日本のポップカルチャーの愛好者だけでなく、グローバル化され、経済的な裏付けも成立していると言わざるをえない。

#### 3. フランスのゴスロリ層の特徴。

2008年のジャパンエキスポ<sup>9</sup>とヴィジュアル系アーティストMiyaviのパリコンサート<sup>10</sup>のあと47人のゴスロリに対して行なったアンケートから (質問に答えた人の数はまだ少なく調査はまだ続くにしても)、「フランス人のゴシックロリータ」のプロフィールが浮上する。

- 平均年齢16歳。
- 都会に住んでいる。
- 少女は多様な社会層の出身で、ゴスロリ服には月に30ユーロから200ユーロぐらいつかう。平均52ユーロである。
- 周囲の人の意見はまちまち。
  1. 母親達はあまりゴスロリが好きではないのに「若い者の過ちは大目に見てやらなければならない」と思うそうだ。それに、少女は裁縫ができないから、母親の手伝いが必要で、ジェネレーション・ギャップを超えて一緒に服を作る。
  2. 父親達の多数 (92.2%) は娘の服に反対か関知しないか、とにかくゴスロリは「滑稽」だとか「下品」だと判断する。
  3. 学校のクラスメートはこのマニアのことをたいてい知らなくて、ゴスロリ服の興味にある友達にインターネットで会合する。
- 68%は街で、特に乗り物の乗客から馬鹿にされる。ときにはのしられたこともある。
- 32%は日本への旅行経験者。
- 日本と全く同じゴスロリカテゴリーである (インダストリアルやサイバーパンク ロリータ、エレガントゴシックロリータ、スイートルリータ)。

要するにフランス人のゴシックロリータは日本と日本ポップカルチャーのファンであって、都会に住んでいて、マニアと言えはその母親が重要な役割を演じ

る。ゴスロリマニアは多様な社会階層の出身である。

それに、この調査によると、ゴシックロリータ系の服装に興味のあるフランスの少女にとって一番大切なことは、流行や着方ではなく、「私」ではない登場人物を演じて、役を完全にこなして、毎日の生活を忘れることであると言える。もちろん、衣服の耽美性は重要であるが、演劇性、遊び、また同じ興味のある友達に出会うことが大切であるようだ。

この発表はフランスのゴスロリ系の紹介であるが、この流行についてこういうことも言える。実はフランスゴシックロリータ系そのものは、ほかの角度から見れば、フランスでのゴシックロリータの登場が単なる流行ではなく、日本が世界、特にフランスの若者にとって新しい文化的な照合国を付していることを示している<sup>11</sup>。80年代の日本といえば、フランス人の若者にとっては日本製の車やSonyウォークマンなどの国であって、現在は、*Naruto*、*Dragon Ball*、*Death Note*のような漫画とアニメ、ゴスロリの流行、ヴィジュアル系音楽の国となっている<sup>12</sup>。数年前、オタクしか興味を持たなかった日本ロックは、2005年7月のオリ

ンピア劇場では約2800人のファンを前にして*Dir en Grey*はコンサートを行い、3年後*L'Arc-en-ciel*はパリのZenithを満席にした(6500人)。日本ロックはある程度まで西洋のロックバンドを影響し、たとえばドイツのバンドの*Tokio Hotel*と*Cinema Bizarre*は日本ヴィジュアル系アーティストを真似している。同時に日本のポップカルチャーが広まることで、「カワイイ」という言葉はフランスに流行し、ポップカルチャーの主流と次第になった。現在、「カワイイ化」という現象はオタク世界の領域をこえて、メインストリームファッションになった<sup>13</sup>。例えば数年前と比べると大人サイズのハロー・キティ服を見つけるのはとても簡単になった。

#### おわりに

フランスでのゴシックロリータの登場は単なる流行ではなく、「かわいい化」が主流の社会として日本が、世界特にフランス若者にとって、新しい一つの文化的なモデルとなっているをあらわしている。



【写真1】 フランスのゴシックロリータ



【写真2】 フランスのゴシックロリータ



【写真3】 フランスのゴシックロリータ



【写真4】 フランスのゴシックロリータ



【写真5】 パリのゴシックロリータ店



【写真6】 パリのゴシックロリータ店



【写真7】 パリのゴシックロリータ店



【写真8】 パリのゴシックロリータ店



【写真9】



【写真10】 Cinema Bizarre

注

- 1 水野麗、「ゴシック・ロリータ」コミュニティにおけるセルフ・イデンティティ」、イメージとしての日本、大阪大学、*The 21<sup>st</sup> Century COE Program, Interface Humanities – Research Activities 2004年-2006年*、(Osaka University コミュニケーションでサイン・センター)、大阪、2007、参照のこと。
- 2 すなわちスイートルリータとは、白やピンク色とハローキティの苺柄を基調とした甘いロリータ・ファッションのことをいう。この少女の模範となるものは不思議の国のアリスや子供服である。
- 3 ELG系のゴスロリはゴシック系のものや、黒い服、十字架、黒いレースの靴下やエナメル靴を評価する。
- 4 最新のゴシックロリータのなかのトレンドの一つで、パンクやエレクトロ音楽のファンの服とアマロリのミックスの鮮やかな色、ビニール服、プラットフォーム靴を特徴とする。
- 5 オタクという言葉は日本とフランスでは意味が必ずしも同じではない。フランスでは日本ポップカルチャーに興味のある人を意味し、秋葉原のメイドカフェへ行って、若いグラビアの写真を撮る男の人とは関係なく、ネガティブな意味は全然ないと言える。東浩紀、「動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会」、講談社、東京、2001、参照のこと。フランス語版：AZUMA Hiroki, *Génération Otaku : Les enfants de la postmodernité*, Hachette Littératures, Collection *Haute Tension*, Paris, 2008, 参照のこと。
- 6 例えば、ポップスターのグウェン・ステファニーのPV「What are you waiting for?」は不思議の国のアリスやゴシックロリータに大きく影響されていると言える。
- 7 PARIS MODE, *La mode au pays du soleil levant - 2e édition*, Paris Première, 2003, 参照のこと。
- 8 「ケラ! マニアックス」(Vol.6) 2006年4月6日、東京、Index Communications, 2006. p. 99-114, 参照のこと。
- 9 パリ・*Japan Expo*、2008年7月3日~6日
- 10 パリ・オリンピア劇場、2008年7月6日
- 11 宮台真司、「サブカル「真」論」、ウェイツ、2005、参照のこと。
- 12 前田雅司、「サブ・カルチャーの異質性とクール・ジャパンの実態」、イメージとしての日本、大阪大学、*The 21<sup>st</sup> Century COE Program, Interface Humanities – Research Activities 2004年-2006年*、(Osaka University コミュニケーションでサイン・センター)、大阪、2007、参照のこと。
- 13 四方田犬彦、「かわいい」論、筑摩書房、2006、参照のこと。